

## 5.長岡京跡右京第971次(7ANSID-5地区)

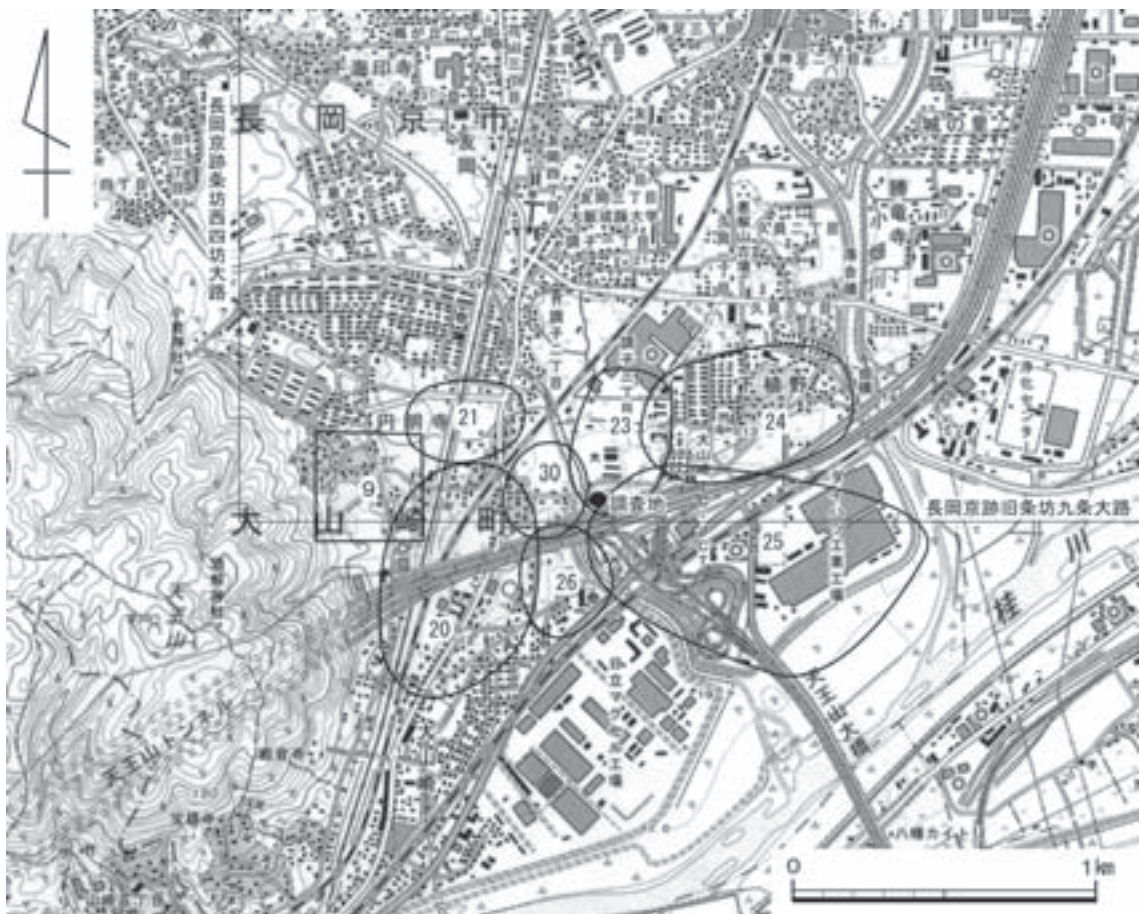
### ・松田遺跡発掘調査報告

#### 1. はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部の依頼を受けて、主要地方道大山崎大枝線の改良工事に伴い実施したものである。

調査対象地は乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田地内にあり、長岡京条坊復原図の旧条坊によれば右京九条二坊十三町にあたるが、新条坊では長岡京外となる。また、京都府・大山崎町の遺跡地図では、縄文時代から中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれ、下植野南遺跡に接する位置にある。

この松田遺跡では、調査地北側の大山崎中学校が、第二外環状線道路建設に伴い改築されることになり、大山崎町教育委員会により新校舎建設の予定地内の発掘調査が平成20年に実施された



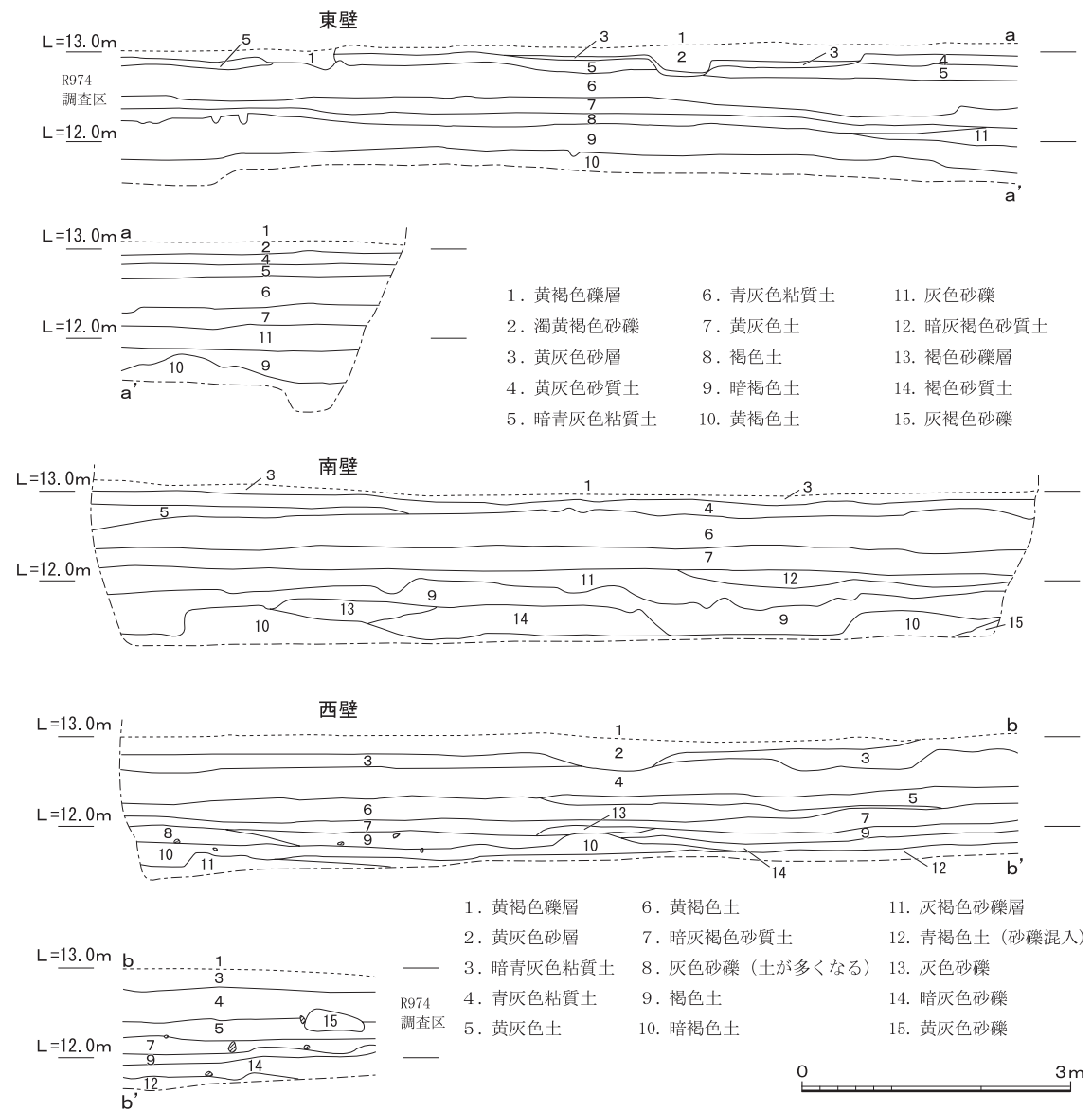
第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

23: 松田遺跡	25: 下植野南遺跡	24: 宮脇遺跡	30: 金蔵遺跡
26: 算用田遺跡	21: 久保川遺跡	20: 百々遺跡	9: 円明寺跡(九条家屋敷跡)

(長岡京跡右京第933次調査)。この調査では、縄文時代から弥生時代の流路跡、土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡10棟・掘立柱建物跡4棟・流路・溝・土坑、中世から近世の溝・掘立柱建物跡3棟などが検出されている。

当調査研究センターでは、平成21年1月から3月に、調査予定地内に遺構が存在するかを確認するため、長岡京跡右京第963次調査として確認調査を実施したところ、古墳時代の竪穴式住居跡と推定されるものを2か所で検出した。今回の調査は、右京第963次調査の調査地のうち、南側を中心に主要地方道大山崎大枝線新設改良工事に伴う発掘調査として実施したものである。

現地調査は、調査第2課調査第3係長石井清司、専門調査員石尾政信が担当した。調査期間は平成21年4月21日から6月10日までを要した。調査面積は150㎡である。現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。<sup>注1</sup>また、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。<sup>注2</sup>厚くお礼申し上げたい。



第2図 調査地土層図

なお、本報告書は石尾が執筆した。図に記した国土座標は日本測地系(旧座標)である。

## 2. 調査の概要(第3図)

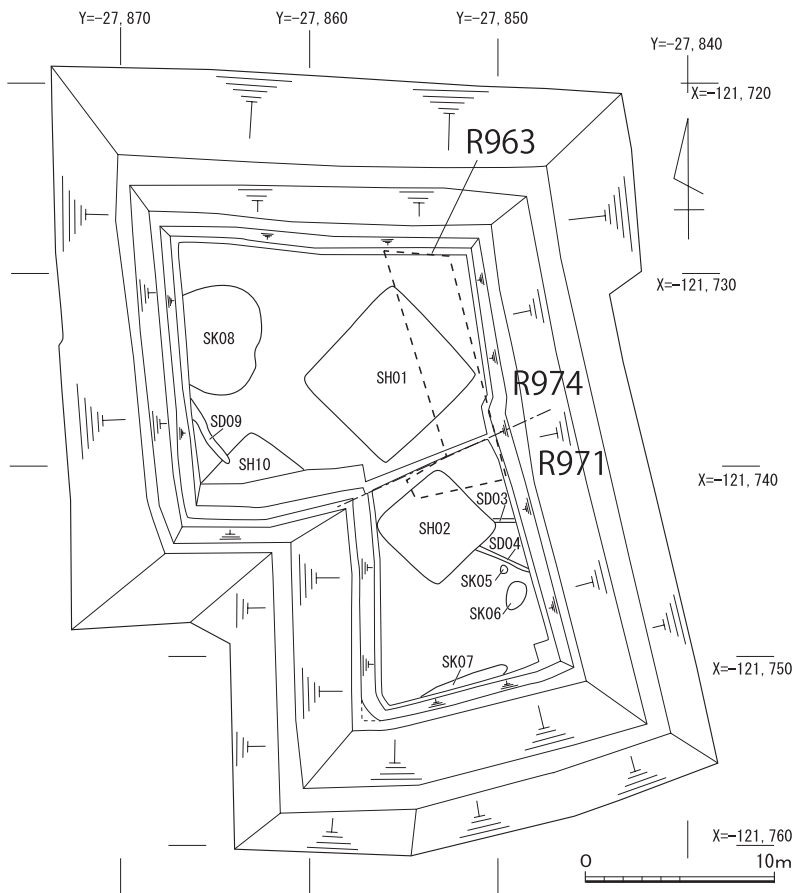
調査地は工場跡地のため、約3mの盛土層があり、その下層で小泉川の氾濫による砂礫層が約2m堆積していることが右京第963次調査で確認されていたため、これらの盛土層・堆積層を重機を使用して除去した。また、砂礫層の下に青灰色系の砂質土・粘質土が0.5m前後堆積し、その下の黄灰褐色土、褐色土も重機を使用して除去した後、暗褐色土の遺物包含層を人力で除去したうえで、遺構検出に努めた。その結果、調査地の東部は黄褐色粘質土をベースとして遺構が検出されるが、西部は黄褐色粘質土を挟り込んだ砂質土や砂礫混入土層面から遺構が検出された。小泉川の氾濫による砂礫層からは、近世の陶器、土師器、瓦などが若干採集できた。青灰色粘質土、黄灰褐色土からは土師器碎片がわずかに採集できたが、時期は不明である。

検出した遺構には、右京第963次調査で確認していた竪穴状遺構を古墳時代後期の竪穴式住居跡(SH02)として確認し、その規模を明らかにするとともに、新たに土坑2か所(SK05・06)、溝(SD03・04)を検出した。以下、検出した遺構について記述する。

## 3. 検出遺構

### 1) 古墳時代の遺構

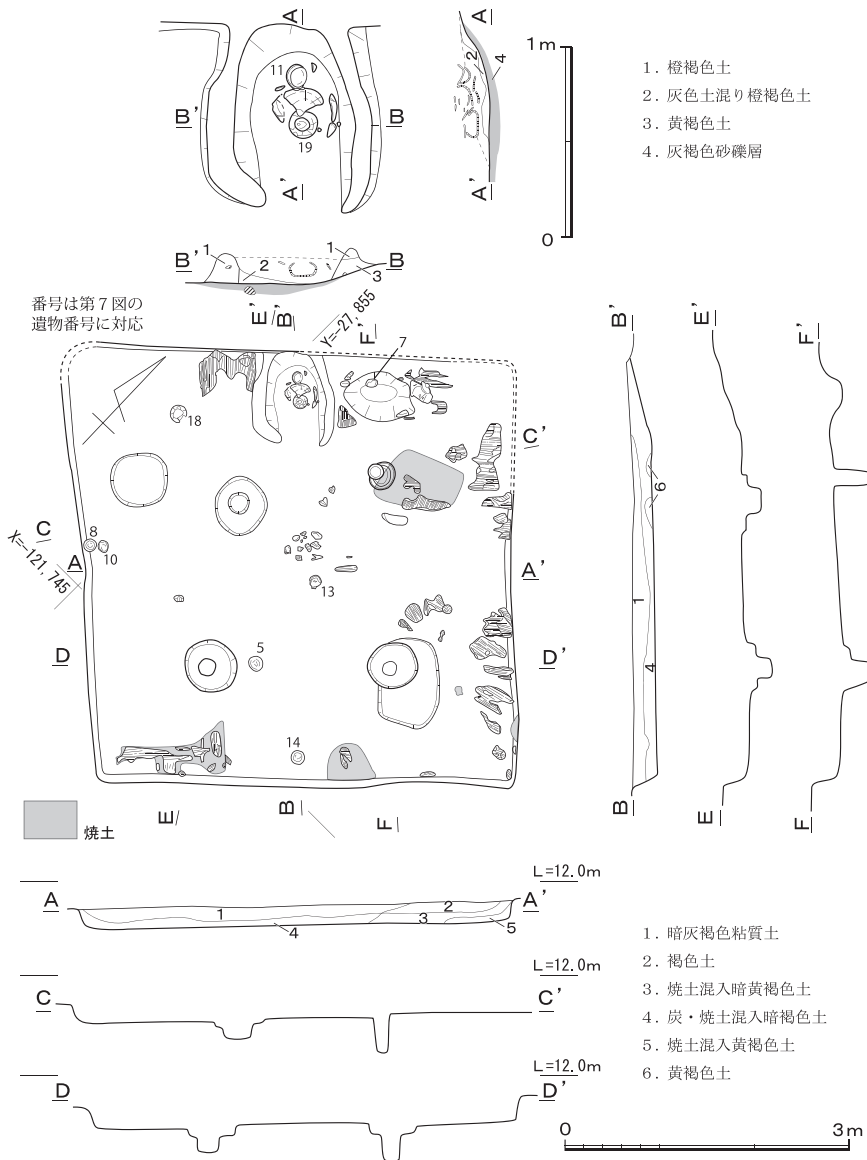
竪穴式住居跡SH02(第4図) 検出面からの深さ約20cm、一辺約4.5mの方形竪穴式住居跡である。中軸線が約45度西に振れている。主柱穴を4か所で検出した。周壁溝はない。北西辺の中央部に土師器の壺を支脚として据え置いた竈が付く。竈は、遺構のベース面である砂礫層を掘り残し、その上に粘土を張り付けて周壁としている。竈は、長さ・幅ともに約1mを測る。煙出しは不明である。竈の東側には、0.7×0.5m、深さ約0.2mの貯蔵穴があり、中から須恵器杯身(第7図12)と、



第3図 調査地平面図

貯蔵穴の東辺沿いで土師器甕の口縁部が出土した。また、貯蔵穴の北側でも須恵器杯蓋(第7図6)が出土している。住居床面上では、土師器甕(第7図18)や完形品の須恵器杯身・杯蓋(第7図4・7~10・13・14)が散在しており、土師器は被熱を受けた状況であったが、須恵器は熱を受けた形跡は認められない。床面付近では数多くの焼土を検出し、住居跡の竈付近と北東辺・南東辺に沿って、多数の炭化材を検出した。このような炭化材・焼土の検出状況から、この竪穴式住居は焼失住居と判断できた。床面出土の遺物が被熱を受けたものと受けていないものがあり、特に竈周辺の土師器の甕の底部のみが明瞭に二次焼成されていた。住居の屋根が焼け落ちた際に、床面上に置かれた場所の違いで被熱しなかったのか、土師器は竈に置いて煮炊きを使用したのか、須恵器だけが鎮火後に置かれたのか、いくつかの可能性が考えられるが、特定できない。

土坑SK05(第5図) 竪穴式住居跡SH02の南東で検出した土坑である。直径約1m、深さ14cmの円形土坑である。検出面で土師器高杯の杯部が逆転して出土した。埋土は褐色土である。この褐色土は竪穴式住居跡SH02の東部で見られる第2層褐色土と類似している。



土坑SK06(第5図) 竪穴式住居跡SH02の南東で検出した。長径3.2m、短径1.9m、深さ0.5mの長円形土坑である。埋土は3層あり、最下層に散乱して土師器の甕の底部片、須恵器片や土師器片が出土した。廃棄土坑と推定される。

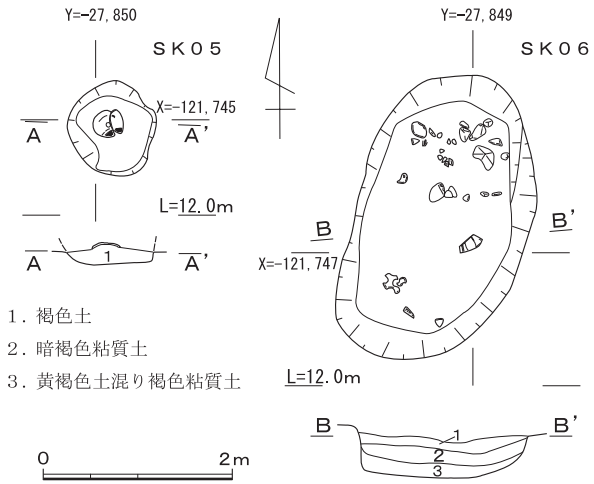
2) 時期不明の遺構  
溝SD03 竪穴式住居跡SH02の北東辺の南部から東に延びる素掘り溝である。幅15cm、深さ5cmを測る。少量の焼土が出土した。

溝SD04 竪穴式住居跡SH02南東辺から南東に延びる素

第4図 竪穴式住居跡SH02実測図

掘り溝である。幅20cm、深さ5～10cmを測る。溝S D03と同様に少量の焼土が出土した。土師器細片が出土したが、時期のわかるものはなかった。これら2条の溝は、焼土が出土しているが、竪穴式住居跡S H02とは関連しないと推定される。

溝S D07 調査地の南で検出した長さ4.8m、深さ0.2mの東西方向の溝である。遺物は出土していない。



第5図 土坑S K05・S K06実測図

#### 4. 出土遺物(第6・7図)

小泉川の氾濫による砂礫層からは土師器片、陶器、瓦が出土した。青灰色粘質土・黄灰褐色土から少量の土師器片が出土したが、時期は不明である。褐色土・暗褐色土や西南部の黄褐色土を挟り込んだ砂質土・砂礫混入土からも土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。

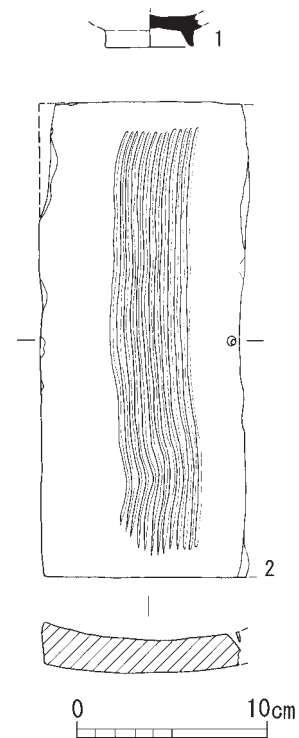
遺構に伴う遺物として、竪穴式住居跡S H02と土坑S K05から古墳時代後期の土器が出土している。以下に主な遺物について記述する。

##### 1) 砂礫層出土の遺物(第6図)

1は陶器の底部である。底部径4.7cmを測る。内面に淡乳灰色の釉薬がかかり、外面は無釉である。2は平瓦である。凹面に櫛状の工具による幅4.2cmの搔線がみられる。長さ15cm、残存幅約10cm、側面の厚さ2.3cmを測る。中央付近に釘穴が見られるので近世の棧瓦と推定される。これらは江戸時代(近世)のものである。

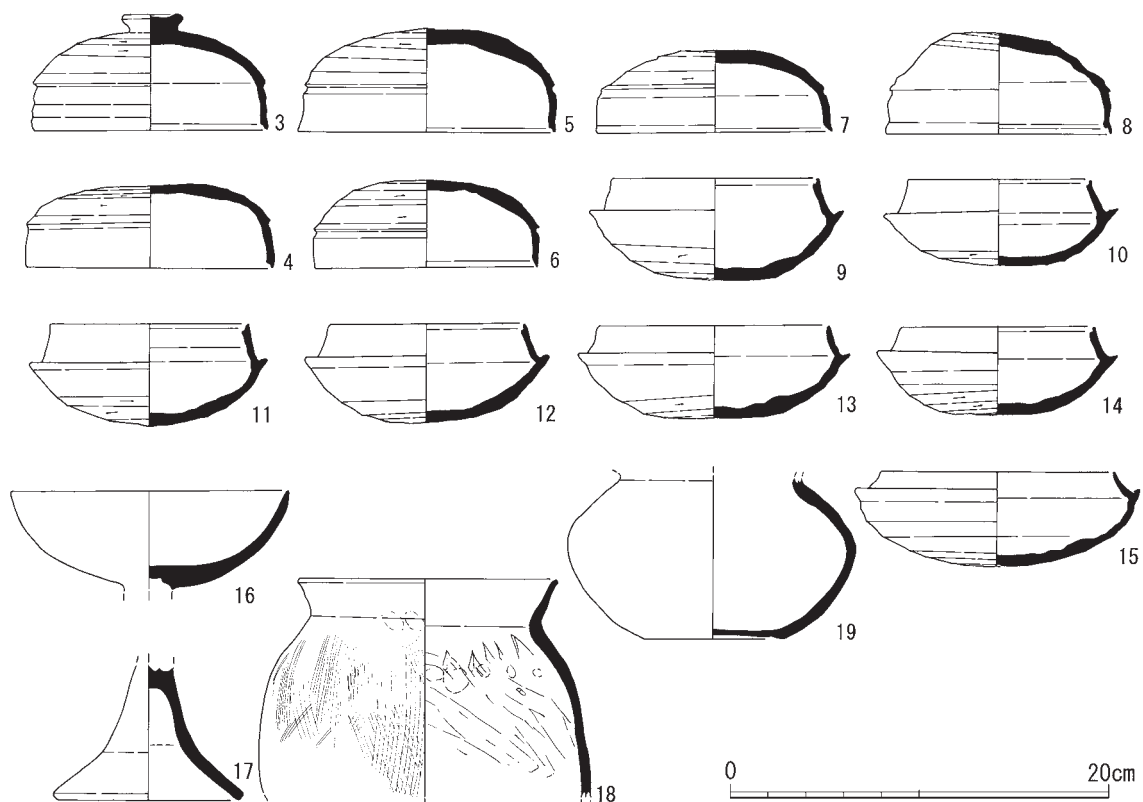
##### 2) 竪穴式住居跡S H02出土遺物(第7図)

3はツマミが付く須恵器有蓋高杯蓋である。口径12.2cm、器高6.15cmを測る。胎土に砂粒を含み、焼成が良好で暗灰色を呈す。竈の北東から出土した。残存率は全体の60%程度で、混入の可能性がある。4は須恵器杯蓋である。口径12.9cm、器高4.35cmを測る。胎土に黒色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。竪穴式住居跡内の床面からやや浮いた状態で点在して出土し、ほぼ完形品に復原できる。5は須恵器杯蓋である。口径13.5cm、器高5.45cmを測る。胎土に2mm以下の白色粒子を含み、焼成が良好で暗灰色を呈す。住居内南西部の柱穴の北東の床面から出土した完形品である。6は須恵器杯蓋である。口径11.6cm、器高4.6cmを測る。胎土に5mm以下の砂粒を含み、焼成が良好で明灰色を呈す。貯蔵穴の北西部に接して出土した。ほぼ完形である。7は須恵器杯蓋である。口径12.3cm、器高4.3cmを測る。胎土に白色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。



第6図 出土遺物実測図(1)

す。竈の北東から出土した。ほぼ完形のものである。8は須恵器杯蓋である。口径11.7cm、器高5.35cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く灰色～暗灰色を呈す。住居跡南西辺沿いの中央近くの床面から出土した。完形品である。9は須恵器杯身である。口径10.8cm、器高5.4cmを測る。胎土がやや粗く、焼成良好で灰色を呈す。北東柱穴の近くの床面から出土した。ほぼ完形品である。10は須恵器杯身である。口径9.5cm、器高4.6cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く灰色を呈す。住居跡の南西辺沿いの床面で、8の須恵器杯蓋と並んで出土した。完形品である。11は須恵器杯身である。口径10.3cm、器高5.4cmを測る。胎土が良好で、焼成も良く灰色を呈す。竈の燃焼部北から出土した。完形品である。12は須恵器杯身である。口径10.2cm、器高5.25cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良く明灰色を呈す。貯蔵穴内から出土した。ほぼ完形品である。13は須恵器杯身である。口径12cm、器高4.9cmを測る。胎土に3mm以下の黒色粒子を含み、焼成がやや甘く淡灰色を呈す。住居跡の中央部で、床面より若干浮いた状態で出土した。完形品である。14は須恵器杯身である。口径10.1cm、器高4.65cmを測る。胎土に5mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成がやや甘く灰褐色を呈す。住居跡の南東辺沿いの中央付近の床面から出土した。ほぼ完形品である。15は須恵器杯身である。口径12.2cm、器高5cmを測る。胎土は密で、焼成も良好で灰色を呈す。住居跡東部の埋土上層から出土した。残存率は約60%である。17は土師器高杯の脚部である。底径9.6cmを測る。竈の内部から出土した。脚部の約半分が遺存している。18は土師器甕である。口縁部が「く」字に外反し口径13.3cm、残存高12.5cmを測る。体部外面にハケ目があり、内面はヘラ削りである。



第7図 出土遺物実測図(2)

体部外面は被熱して暗赤褐色を呈し、内面は暗灰色を呈す。竈の南西部約40cmの床面上で出土した。口縁部と体部下半を欠損する。19は口縁部を欠く土師器壺の体部である。体部径15.3cm、残存高8.75cmを測る。竈内に支脚として置かれていた。被熱して暗赤褐色を呈す。

### 3) 土坑 S K 05 出土遺物 (第7図)

16は土師器高杯の杯部である。口径14.5cmを測る。土坑 S K 05内から口縁を下に向けて出土した。胎土に8mm以下の黒色粒子を多く含み、焼成も良く黒斑があり赤褐色を呈す。脚部は失われているが、杯部は完存している。

## 5. まとめ

今回の調査で、わかったことは以下のとおりである。

小泉川の氾濫により大量の土砂が上流から運ばれ、この調査地に約2mの砂礫が堆積していることが判明した。砂礫層から出土した陶器・棧瓦から堆積時期は近世であることがわかった。

近世の砂礫層の下には、青灰色粘質土が調査地全体に広がることから、やや安定した時期があり、断面等観察から水田などの耕作地として利用されたと推定できる。この粘質土などから時代を特定できる遺物が出土しなかったため時期は明確にできなかった。

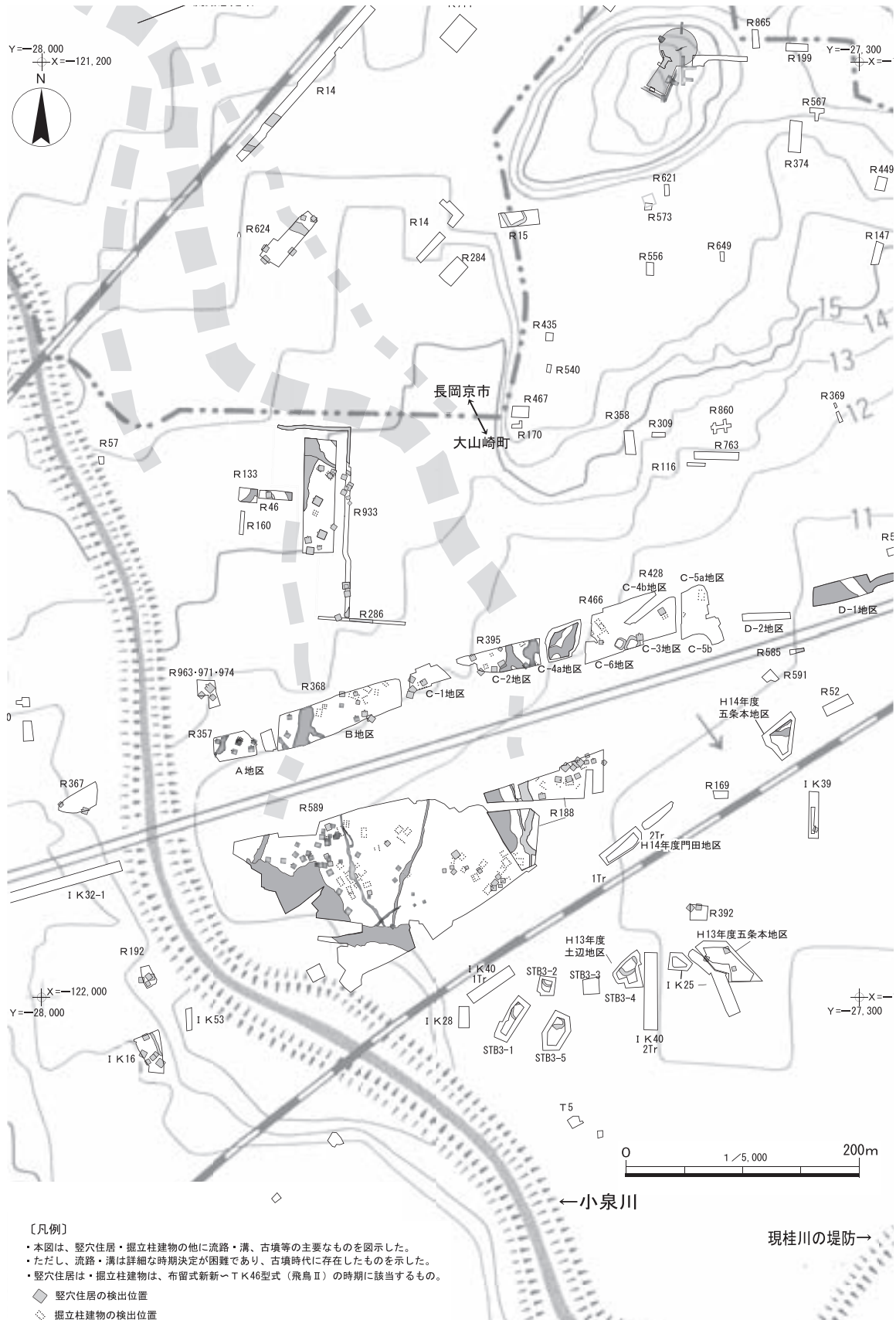
この調査では長岡京期の遺構・遺物は検出されなかった。粘質土等の堆積層で地盤が軟弱であるため利用されなかった可能性が高い。今回の調査地の東側約100mの名神拡幅工事における事前調査(右京第368次調査)では、平安時代前期の掘立柱建物群が検出され、平城宮式軒瓦をはじめ多量の遺物が出土しており、公に近い施設または官の施設と推定されている。また、山城国府跡の可能性も指摘されている。

下層では古墳時代後期の竪穴式住居跡 S H 02が検出できた。竪穴式住居跡 S H 02は、炭化材や焼土層が検出され、完形の須恵器杯類が住居内から点在して出土したことから、焼失住居と推定した。住居跡の時期は、床面から出土した須恵器杯類の特徴などから陶器MT15の時期と判断した。遺構の項で述べたように、失火による火災なのか、廃棄に伴う火災なのか、不明である。

隣接地の右京第974次調査でも、古墳時代中期の竪穴式住居跡2基を検出している。今回の調査地が縄文時代～古墳時代の集落跡である松田遺跡の南西端にあたり、縄文時代～古墳時代の集落跡である下植野南遺跡の西北側に隣接する場所である。古墳時代中期～後期にかけては、第8図に示すように、両遺跡とも多数の竪穴式住居跡が検出されている。両遺跡のほぼ中間地点で、同時代の竪穴式住居跡が検出されたことから、古墳時代中期～後期にかけて、松田遺跡と下植野南遺跡が一体となり、大規模な集落が営まれていたことがより明確となった。

注1 調査参加者 松元章徳・川原惇司・武本典子・福島厚子・近澤富美代・梶理恵子

注2 大山崎町教育委員会 林 亨・寺嶋千春・古閑正浩



第8図 周辺調査における遺構配置(古墳時代中期～飛鳥時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡の分布)  
『パンフレット 速報展 倭人のムラを掘る——大山崎中学校新校舎の発掘調査から——』  
(大山崎町教育委員会発行)を転載・加筆



# 圖 版



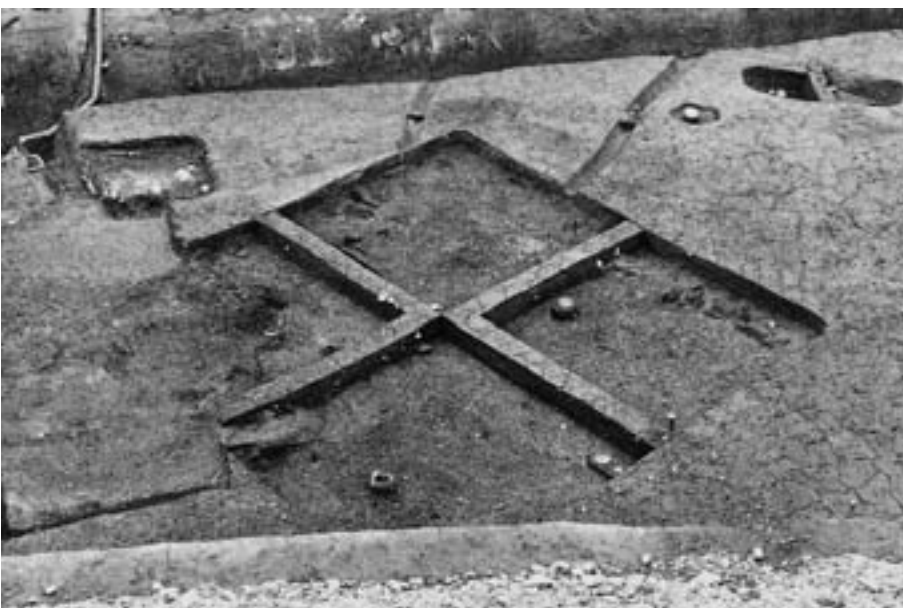
竪穴式住居跡 SH02 全景(東から)



(1) 調査前風景(南西から)

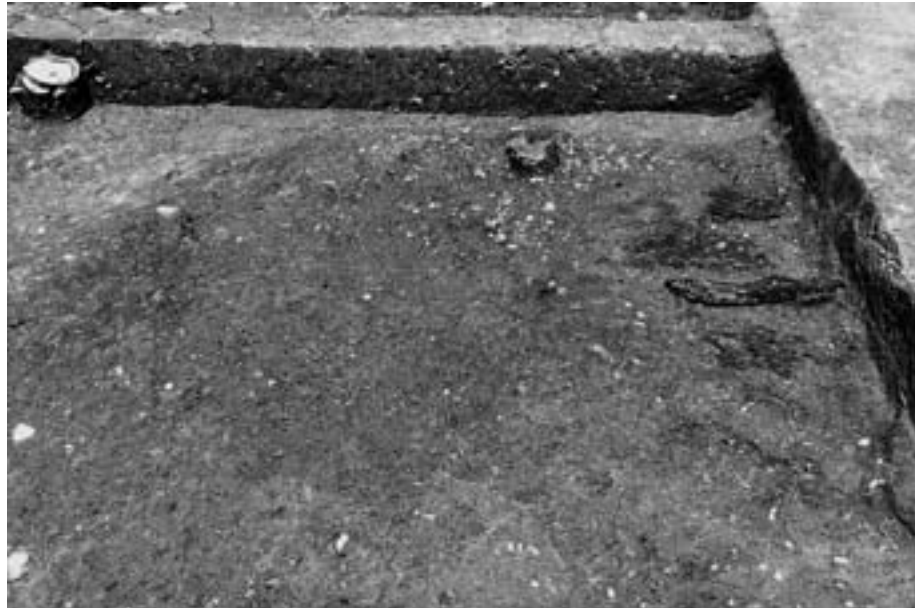


(2) 調査地全景(西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02 焼土層・炭化材検出状況(西から)

(1) 竪穴式住居跡 SH02  
南東部の焼土層・炭化材  
検出状況(南東から)



(2) 土坑 SK05 土器出土状況  
(南から)



(3) 土坑 SH06 土器出土状況  
(西から)





(1) 竪穴式住居跡 SH02  
土器出土状況(北西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02  
土器出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02  
土器出土状況(南西から)



(1) 竪穴式住居跡 SH02  
遺物出土状況(東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02  
竈検出状況(南東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH02  
貯蔵穴土器出土状況  
(南東から)



(1) 竪穴式住居跡 SH02 完掘状況  
(東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH02  
竈断割り状況(南東から)



(3) トレンチ東壁断面(西から)







京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141